

巻頭言 「新3ポリシーの策定を終えて」 副学長・学士課程教育機構長 田中亮平	……1
[GCP] 第4回GCP修了式を開催、34名がGCPを修了……	2
[SPACe] 学習セミナーを開催……	3
[CETL] CETL派遣出張 報告……	4
[WLC] 第10回 WLC Global Lecture Series 他……	5
2016年度 FDセミナー……	6, 7
8大学連携事業終了の報告……	7
大学教育再生加速プログラム事業報告会を開催 報告……	8
2017年度学士課程教育機構FDセミナー・FDフォーラム 開催スケジュール……	8

新3ポリシーの策定を終えて

副学長・学士課程教育機構長 田中亮平



文部科学省の省令改正を受けて、昨年度4月から検討が始まった新3ポリシーがまとまり、このほど大学のホームページ等で公開された。

中教審大学教育部会によって示されたガイドラインによれば、今回の改訂のポイントは、大要すれば次の2点であった。

- ①大学全体と学部等の部局を通じて、記述内容・様式などの点で、一貫性と整合性を持ったものにする。
- ②さまざまなステークホルダー、とりわけ受験生やその保護者などに、分かりやすいものにする。

もちろん、各ポリシーが実際の教育活動との間で持つ相応性や連関性は、これまでも意識されていたところではあるが、今回の改訂に際しては、この点をさらにブラッシュアップし、本学の教育改善に役立てていくことが重要な前提となった。

1. ラーニング・アウトカムズにもとづくディプロマ・ポリシー

今回のディプロマ・ポリシーは、大学や学部・研究科等が掲げる「教育理念」と「教育目標（養成する人材像）」のもとに、各学部・研究科で定めたラーニング・アウトカムズを盛り込んだものとなっている。

創価大学全体としては、「創造的人間」の育成という、グランド・デザインに策定された目標を次の4つのラーニング・アウトカムズに分類し、ディプロマ・ポリシーの中心にすえた。

- 知識基盤：幅広い知識と高度な専門性
- 実践的能力：知識を社会に応用する力とコミュニケーション力
- 国際性：多様性を受容する力と他者との協働性
- 創造性：統合する力と創造的思考力

新しいディプロマ・ポリシーに示されたこれらの知識・技能、そして態度を身につけた世界市民を育成する、これがこれからの創価大学全体の目標となる。

2. アセスメントを意識したカリキュラム・ポリシー

各学部・研究科のディプロマ・ポリシーに示されたラーニング・アウトカムズを達成するために、どのように教育課程を編成していくか、その方針がカリキュラム・ポリシーである。

先の大学教育部会が示した、3ポリシー策定にあたってのガイドラインによれば、これに加えて、「当該教育課程

における学修方法・学修過程、学修成果の評価のあり方等を具体的に示すこと」とある。とりわけ学修成果の評価のあり方については、ラーニング・アウトカムズの達成度を、直接・間接評価手法を用いて測定することで、点検・評価することになる。これが科目レベルからプログラムレベルの教育改善に役立てられることで、カリキュラムの内部質保証が機能する仕組みとなっている。

また、上記ガイドラインに示されたもう一つの柱が、初年次からキャリアまで、つまり入学から卒業までの学士課程教育を、順次性・体系性を基準として編成する必要性である。本学でも、入学前教育を含む初年次教育が重要な課題であるとして、グランド・デザインの教育戦略に、第2ステージの取組課題として挙げられ、初年次教育推進室が設置されている。新たなカリキュラム・ポリシーのもと、この推進室が共通・専門・キャリアへと至る体系的カリキュラムの基点として動くことになる。

3. 「学力の三要素」と多様性・アドミッション・ポリシー

ディプロマ、カリキュラムとひもづく形で、アドミッション・ポリシー、すなわち入学者選抜方針が策定されたが、今回の改訂では特に高校時代までに培った、「知識・技能」・「汎用的スキル」・「態度」からなる「学力の三要素」を意識しつつ策定することが求められた。

他方では、学生の多様な能力を評価できるための方針の策定と、それが実際の入試制度に反映されていることを明示する必要もあった。

本学は高大接続改革の流れを受けて、アクティブ・ラーニングを取り入れた新たな形でのAO入試を開始する。今回のアドミッション・ポリシー改訂作業も、こうした変化を取り込む形で行なわれた。

以上、3ポリシー改訂の特徴を、かいつまんで振り返ってみた。内部質保証に耐えうる体系性と検証可能性を備え、しかも一貫性と分かりやすさを意識したものへとブラッシュアップされたと言える。時あたかも来年度は多くの学部で新カリキュラムへの転換を迎える。イングリッシュ・トラックに象徴される、創造的世界市民育成のプログラムが本格的に展開されることになる。3ポリシー改訂を真に意味あるものとするのは、新カリキュラムの成功であると言える。そしてその成功は、全学と各部局のそれぞれの教育目標へ向けて、学生の成長が一段と加速されるかどうかにかかっているのである。

第4回GCP修了式を開催、34名がGCPを修了

GCPコーディネーター 教授 佐々木 諭

第4回グローバル・シティズンシップ・プログラム（GCP）の修了式が、3月17日（金）に開催され、馬場善久学長より3期生と4期生の計34名にGCP修了書が授与されました。今年度修了したGCP生は、国内外の大学院進学、国際的な優良企業への就職、外務省専門職員採用試験、公立学校教員採用試験への合格など、目覚ましい結果を示されました。

修了生を代表して外務省専門職員試験に合格した松本英之さん（GCP3期生・法学部卒業）と英国大学院進学予定の佐藤幸恵さん（GCP4期生・文学部卒業）が挨拶をしました。

松本さんは、大学3年時に香港大学に交換留学生として留学され、課題や講義内容のレベルの高さに挫けそうになりながらも、最後まで挑戦を続けられました。挨拶では、「決して華やかな舞台を求めるのではなく、どんな場所でも全力を尽くし信頼される人生を歩んでいきます。地道に努力を重ね、冷徹な知性と温かな心を持った外交官に成長していきます」と決意を述べました。

佐藤さんは、2016年にケニアで開催された第6回アフリカ開発会議（TICAD VI）の公式サイドイベント「日本・アフリカ学生イノベーターズ・エキスポ」に参加し、「日本の伝統文化を生かした特別授業をアフリカの教育へ」と題した発表が最優秀を受賞しました。佐藤さんは、海外大学院への進学を決意したことに触れながら、「入学時には自信がないことを理由に、自分で限界を作り挑戦することから逃げていました。日々の挑戦の中で、自分にしか果たせない使命があると自覚し、自信を持って高い壁から逃げずに乗り越えられるようになっていきました。それを可能にしてくれたのは、私の可能性を私以上に信じ、また鍛え続けてくれたGCPという存在があったからです。この4年間で、私の人生、生き方を大きく変えたと感じています」と感謝を述べました。

今回修了した34名のTOEIC平均点数は902点となり、入学時より平均264点上昇しました。また、900点以上の割合は修了生の6割を超えています。グローバル・シティズンに求められる資質である論理的思考力、多面的考察力、問題解決力、多様性の尊重も一人一人が高いレベルで習得し、修了を迎えました。

現役のGCP生も、GCPで鍛えた力を存分に世界で発揮しています。2016年8月に北京で開催された「Girls20サミット2016」には、池田桜さん（法学部4年）が日本代表1名に選考されました。また、2017年2月にコロンビアにおいて開催された「第16回ノーベル平和賞受賞者世界サミット」に、生駒比奈子さん（法学部3年）、廣瀬文人さん（法学部3年）、亀井咲希さん（経済学部3年）の3名が参加しました。サミット閉会式では、サミットに参加した青年が作成した「青年宣言」を生駒さんが読み上げました。

本年4月には、8年目を迎えたGCPに、あらたに34名のGCP8期生を迎えました。それぞれが大いなる目標を持ち勉学に挑戦しています。GCP生の伝統を受け継ぎ、新しい発展を担いゆくことを期待しています。



1987年ノーベル平和賞受賞のアリアス・サンチェス元コスタリカ大統領と



2014年ノーベル平和賞受賞のカイラシュ・サティアーティ氏と



第4回GCP修了式後に記念撮影



Girls20サミット2016 参加者と記念撮影



SPACeでは、2016年度後期に2人のHELP DESKスタッフ（学生）による学習セミナーを開催しました。本ニュースレターでは、学習セミナーを担当した2人に感想を書いてもらいました。

「寮長が語る 残寮生のためのGPA向上セミナー」を振り返って

工学部情報システム工学科4年 戸田 光一

私は、日本全国からの学生、そして世界各国からの留学生と共に生活をする学生自治寮で、日々後輩を生活面や学業面でサポートする寮長をしています。今回、学部で特待生に選ばれ続けた経験を活かし、クラブや寮などと両立をしながらGPAを向上させるための学習セミナーを11月22日と29日に開催しました。

この学習セミナーでは、学生が学生に向けて開催した事で、教員が行うセミナーとは雰囲気少し異なり、学生から気軽に質問や相談などを受けることができました。学習目標を学生同士の小グループで楽しく話し合ったり、自分にあった実践方法などを考えたりして、学生同士が触発し合い、とても温かい雰囲気で楽しく開催する事ができました。また、学生同士だからこそ分かる悩みなども、共感し合いながら、大変なのは自分だけじゃない、お互いに頑張ろうと決意し合う事ができました。この学習セミナーを開催し感じた事は、大学建設の主役は学生であり、学生の力で大学はもっと良くなるということです。

参加した学生からは、自分の能力を決めつけずに、もっと挑戦していきたいという声があり、自身の苦勞した中での乗り越えた経験が、他の学生の学習意欲やモチベーションの向上に貢献できた事を嬉しく思います。セミナーの名前はGPAの向上というも

のでしたが、セミナーの中で何の為に自分たちは学ぶのか、ただGPAを向上させるための方法ではなく、約束を守ったり、出された課題を期限以内に提出しようなど、社会に出てからも大切な事が、成績にも結び付く話などをしました。知らない人の前で、自分の経験を話すのは初めてだったので緊張しましたが、メモを取りながら真剣に聞いてくれ、参加してくれた学生、そして私も充実した時間を過ごす事ができました。



「工学部・理工学部必見! GPA向上セミナー ―実験レポート編―」を振り返って

工学部環境共生工学科4年 林 広大

12月15日、理工学部1～2年生向けの実験レポートの学習セミナーを開きました。これは、理工学部で毎学期開講される実験科目についての対策をするといった内容であり、1～2年生の成績向上を図った初の試みでした。

この学習セミナーを開こうと思ったきっかけは、私が後輩に何か残したいと考えたところにあります。私は、入学する前から、親元を離れて生活するという不安、履修の仕方や単位が取れるかなど勉強面で多くの不安がありました。しかし、入学後は学生寮に入り、多くの先輩が温かく迎えてくれました。加えて、履修や成績についても先輩が優しく教えてくれました。

そこで、その先輩から受けた恩を今度は私が後輩へと還元していきたいと思いました。そして、私は現在総合学習支援センターのもとで、1年生の頃の私と同じだった履修や成績に不安を抱える人の学習相談をさせていただいています。さらに、今回同じ学部の後輩に成績向上を図った学習セミナーを開くことができました。セミナーの準備では、自分が1年生のときから今まで書いてきた実験のレポートをひとつひとつ見直して振り返りました。どのように伝えるとわかりやすいか、楽しく受講できるかを考え、夜遅くまで資料を作る日もありました。セミナーでは1～2年生

の多くの理工学部生が参加してくれました。学習意欲の高い学生がこんなにも多くいることに驚きました。そして、セミナー終わりの満足した声が多かったことに、これまでの努力の甲斐があったと感じました。

今回のこのような学習セミナーは、先輩から後輩への伝統がある創価大学だからこそ、学生一人ひとりの可能性を広げゆく創価大学だからこそ成功したのだと思います。これからもこの伝統を誇りに、受け継いでいきます。



<2017年度CETL センター員紹介>

CETLセンター長 望月 雅光 (経営学部)	CETL副センター長 西田 哲史 (経済学部)
碓井 健寛 (経済学部) 中田 大悟 (経済学部)	前田 幸男 (法学部) 中山 賢司 (法学部) 伊藤 貴雄 (文学部)
藤本 和子 (文学部) 波多野 一真 (経営学部)	松本 敬子 (経営学部) 富岡 比呂子 (教育学部) 戸田 大樹 (教育学部)
井田 旬一 (理工学部) 川井 秀樹 (理工学部)	田中 博子 (看護学部) 佐藤 美香 (看護学部)
清水 強志 (SEED) 山下 由美子 (SEED)	<オブザーバー>山崎 めぐみ (SEED)

CETL派遣出張 報告

■ 初年次教育学会第9回大会に参加して CETL/SPACE 助教 木原宏子

2016年9月10日(土)、11日(日)の2日間、四国大学にて開催された初年次教育学会第9回大会に参加しました。今年度は、「初年次教育とエンロールメントマネジメント」という統一テーマのもと、1日目は、企画セッション(ワークショップ)と、特別講演、課題研究シンポジウムが行われ、2日目は、自由研究発表と企画セッション(ワークショップ/ラウンドテーブル)が行われました。

本ニュースレターでは、それらのうち、特別講演について紹介します。

講演では、島根県立大学客員教授の山内太地氏が「初年次教育を活用した学生確保の在り方」というテーマで話されました。山内氏は、武蔵野大学における約20年間の戦

略の他、明星大学や愛知大学地域政策学部などを例に挙げながら、「今後の学生確保を考えるならば、初年次教育と高大接続が鍵となる」と語られました。とりわけ、大学卒業後の就職も見据えて、「能動的な学習習慣」を高校・大学のうちに身に付けさせることが必要だと強調していました。さらに、私立大学が今後生き残るためには、①高校と連携し、アクティブラーニングのノウハウを伝え、信頼を高めること、②地域の二番手高校を狙うことを提唱されました。多くの例は経営戦略の話ではありましたが、初年次教育に携わる一人として、学生を見る視点や企画を考える際に考えなければならない多くの示唆を得ることができました。

■ 第23回大学教育研究フォーラムに参加して CETL特別センター員 森川由美

3月19日・20日、京都大学で開催された「大学教育研究フォーラム」に参加しました。口頭発表、ポスター発表、講演、シンポジウムなどから、多くのことを学んだ2日間でした。なかでも、新井紀子氏(国立情報学研究所社会共有知研究センター長)による特別講演(「人工知能が大学入試を突破する時代、人は何をすべきか?」)とアセスメント・イン・アクションに関するシンポジウムでの平田オリザ氏(東京藝術大学COI 研究推進機構特任教授)による話題提供は、大学入試を軸に、今後の教育の方向を示唆するものでした。

講演で新井氏は、人口知能(AI)の統計的判断精度向上により、AIが合格できる大学入試が増えたものの、小論文など意味を考えて解答する試験の合格レベルに届く見通しは立たなかったが、「ロボットは東大へ入れるか・プロジェクト」に一区切がついた。現在の技術では、AIは検索す

るのみで意味を考えられないので、人間が意味を考え、理解する力の育成に注目し、子どもたちの読解力に関する調査をすすめていると話されました。

他方、平田氏は、ご自身が制度設計した2つの入学試験についてその運用に触れながら話題提供されました。2つの入試ではともに、受験生のコミュニケーション能力や受験生が文化資源をどれだけ文化資本化しているかを測るもので、コミュニケーション能力を人格と切り離し、学力と同等なものにみならずのことでした。そして、両入試でコミュニケーション能力を測ったのは、両大学のミッションステートメントを入学試験に連動させ、一緒に学ぶ仲間を選ぶ試験へ転換した結果だったと話されました。

両氏の話によって、大学入試を出発点にしながら、大学教育はもとより、AIと共存する時代の学校教育や人間形成について重層的に考える機会を得ました。

■ 「2016年度版 共通科目ラーニング・アウトカムズ事例集」を作成

2010年に本学学士課程教育機構では、共通科目における学習成果(ラーニング・アウトカムズ; LOs)の設定に着手し、8項目のLosを策定した(右参照)。そして、2012年度以降、シラバスにおいて科目ごとにこれらのLOs(1科目につき最大3項目)を設定・提示している。さらに2013年度からは、3年以内に教員が設定したLOsと関連させて「授業の『到達目標』に関する自己報告書」を作成することとした。

そして、今回、多様な実践例を共有し、さらなる授業における質の向上をはかる目的で、領域や手法など多様な実践例を選び、「2016年度版 共通科目ラーニング・アウトカムズ事例集—共通科目の学修成果に関する自己点検報告—」を編集した。(本学教員はポータルサイト内(個人メニュー)→「ツール集」→「講義支援関連」からダウンロードできます。)

- 知識基盤 (学生が何を知っているべきか)
 1. 人文・社会・自然科学、健康科学領域の基礎知識を理解する
- 実践的能力 (学生が何ができるようになるべきか)
 2. 多面的かつ論理的に思考する
 3. 問題解決に必要な知識・情報を適切な手段を用いて入手し、活用する
 4. 日本語による多様な表現方法を習得し、明瞭に論じ述べる
 5. 英語と母語以外の他外国語でコミュニケーションを図る
- 教養ある市民としての資質 (知識と能力を用いて何を行おうとするか)
 6. 学びの意味や社会的責務を考え、自らの目標を設定し、自立(律)的に学ぶ
 7. 自他の文化・伝統を理解し、その差異を尊重する
 8. 人類の幸福と平和を考え、自己の判断基準をもつ

第10回 WLC Global Lecture Series 新世代の俳句名人を世界で探して（鹿児島国際大学 デビッド マクマレイ講師）

11月18日、第10回 WLC Global Lecture Series が開催されました。今回の講演でマクマレイ講師は、まず伝統的な俳句の起源と構造を論じ、その後オバマ大統領が日本とアメリカの関係を詠った俳句を例に挙げ、「国際俳句」について説明しました。講師は、朝日新聞のコラムニストとして、また俳句コンテストの審査員として、新しい俳句名人を探し続けてきた自分の役割についても触れられました。

次に、俳句の持つ感情を詩的に詠いあげる力と、写真の持つ瞬間を捉える力を結び付けた写真俳句という視覚に訴える文学形式が紹介されました。講師は、例としてNHK ワールドの俳句マスタースという番組から写真俳句を幾つか取り上げ、出席者がそれを読み上げました。また、ブランド戦略の一環として俳句がいかに使われてきたのかという点を、俳句の首都と自ら宣言している松山市、また消費者が投稿し

た俳句をペットボトルのパッケージに印刷するというキャンペーンを行っている伊藤園などの実例を挙げて論じられました。最後に、講師は出席者に英語で俳句を詠むように促しました。その後、12月2日の朝日新聞の俳句ネットワークには、この時集められた数点の俳句が掲載されました。

今回のレクチャーの参加準備として、少人数でのプレレクチャーセッションが11月15日のお昼休みに開かれました。講演当日は100名ほどの聴衆が参加しました。俳句を英語で詠むのは初めてという学生もいましたが、出席者にとって大変意義深い経験となりました。



WLCプロフェッショナル・ディベロップメント (PD) レポート 教師の成長におけるアクションリサーチの役割について



11月2日、創価大学客員教授であるアン・バーンス先生によるプロフェッショナル・ディベロップメントセッションが行われました。バーンス教授はニューサウスウェールズ大学

でTESOLを研究・指導されている他、アストン大学、シドニー大学、マコーリー大学をはじめ、TESOLリサーチ常任委員会、AILA、オックスフォード大学出版等、様々な舞台で幅広く活躍されています。また、教授はこのセッションのトピックでもあるアクションリサーチの専門家でもあり

ます。

教授はまず、昨今ELTにおける教員教育とプロフェッショナル・ディベロップメントが、教員自身が日常的に関わっている諸問題に注目することを促すボトムアップアプローチをとるようになってきた事を指摘しました。そのようなアプローチの一つとして教授はアクションリサーチをとりあげ、様々なケース紹介を通して、アクションリサーチを有効に進めていく方法論を明確に提示されました。今回のセッションを受け、WLCの数名の教員が教育内容の向上を目指すプロジェクトを始動する事となり、今後のプロフェッショナル・ディベロップメントセッションにも、こういう動きに関連したトピックを導入しようという話し合いが持たれました。

2016年 第1回WLCイングリッシュ・フェスティバル レポート

10月28日、学生がより楽しく英語を学ぶための企画の一つとして初のWLCイングリッシュ・フェスティバルが開催されました。学生3人による5組のチームが参加し、3種類のプログラムで熱いデッドヒートを繰り広げました。

最初に、各チーム3ラウンドずつタブレットを使ったボクヤブラリーゲームが行われました。スクリーンに映し出される激闘に観客は大きな声援を送りました。次に各チームがその場で日本語の会話を英訳するスピード通訳ゲームが行われました。チームメンバーの日本語をきちんと聞き取るため、会場は先ほどと違って変わって静まり返り、WLC講師の2名

の審査員は慎重な協議の末に各チームの順位を決定しました。最後のスキットではチーム毎に作成されたショートビデオを鑑賞しました。ユーモア溢れる内容に会場は笑いに包まれ、見事な編集とメンバーの演技力に賞賛の声があがりました。熱い闘いの末「お茶犬」チームが優勝し、会場は熱い拍手に包まれました。来年度は更に参加者も増え、より素晴らしい企画となる事でしょう。



■ WLC 教員の紹介 高江洲朝子講師



高江洲講師はミシガン州立大学でアメリカ研究の修士号を取得後、青山学院大学、専修大学、首都大学東京、国際基督教大学勤務を経て、2014年よりWLCに所属しています。通訳、翻訳、英語ジャーナリズムに従事していた経験を生かし、GCPではGlobal Issuesを通し英語の運用能力を伸ばすEAP (English for Academic Purpose) を担当しています。これに加え経済学部IP プログラムやWLCの英語科目を担当してきましたが、2016年よりTESOLを学ぶ大学院生に教育実習の指導も行っています。

研究テーマはGlobal Issuesを軸とした、学生の国際

情勢に関する理解、批判的思考法、意見の発信能力 (academic writing及びdiscussion skills) の開発です。その他、online listening教材を用いたリスニング能力やconcept mapを用いた協同的読解力の向上、reflective journalを通し学生のcreative writing能力を高める研究等、様々な角度から学生の知的関心を引き出すことを心がけています。高江洲講師はまた、Self-Access Centerの日本語道場のトレーナーとして、参加者が楽しく有意義に日本語を話し、日本文化にふれる機会を提供できるようスタッフにアドバイスをしています。今後も基礎レベルから上級まで、学生が自律的に学習する姿勢を習得していく事を念頭において、授業を行いたいと考えています。

◆2016年度 第3回学士課程教育機構FDセミナー



講師 森朋子教授

2016年9月30日（金）、関西大学教育推進部・教育関連支援センター教授の森朋子氏を講師に迎え、「2016年度第3回学士課程教育機構FDセミナー」を開催しました（於：中央教育棟AW401教室）。

◆2016年度 第4回学士課程教育機構FDセミナー

11月11日（金）、中央教育棟AW401教室にて「2016年度第4回学士課程教育機構FDセミナー」を開催し、本学教育・学習支援センター長の望月雅光教授（経営学部）が講師を務めました。

今回のFDセミナーは、「ICT活用教育について」をテーマに、望月教授が本学の学生支援ポータルサイト「PLAS (Portal for Learning Assisted Service)」の機能を用いた学生の学習効果を高める方法およびウェブ上で学生自らが問題やその解説を作成し、それをグループで共有して議論を行う等の機能を備えた学習支援システム「CollabTest (コラボテスト)」の導入や活用事例について紹介しました。さらに、マイクロソフト社のパワーポイントを利用した、授業教材動画の作成方法を紹介し、実際に体験しました。

参加者からは、「PPTで簡単に授業動画を作成できると

「アクティブラーニングとしての反転授業を考える」をテーマに、森氏は日本の大学におけるアクティブラーニングの現状、学習を促進する条件、そして、「個人」と「集団」のアクティブラーニングの実践方法とその重要性などについて話されました。その上で、知識修得型・活用探求型の反転授業および受講学生の声を紹介しつつ、深い学びを促す反転授業のデザインについて講演されました。

参加者からは、「今進めようとしている取組の様々なヒントを頂いた。現在の授業での改善点も発見することができた」「学生の学びのプロセスを学ぶことができた。深い理解につなげられる授業づくりにつなげたい」「反転授業を分かったつもりになっていたと反省させられた」などの声が寄せられました。

はとても驚きました」「映像化の使い方について、実際にPCを使いながら体感できたので、すぐに実践してみようと思えました」「動画作成を試し、公欠学生の学びの保障に努めます」「引き続きICT活用教育について取り上げて下さい」などの感想が寄せられました。



講師 望月雅光教授

◆2016年度 第5回学士課程教育機構FDセミナー

12月16日、本学文系大学院国際言語教育専攻、WLCのリッチモンド・ストループ教授を講師として、第5回FDセミナーを開催しました。“Striking a balance in the development and delivery of English-medium courses”をテーマとして、英語を授業の言語とした授業を設計する上で考慮すべき点と、海外の英字新聞や映画などを使う意義についてレクチャーしました。

セミナーでは、上級レベルの学生でも、語学・アカデミック面での支援が必要なこと、学生が興味を持つ教材を使

うことなど、日本語で教えている授業にも共通する、授業設計や教材の考え方を学びました。また、学生の興味・関心とその科目に対するレディネス、英語を授業言語としている場合は、英語のレベルを考慮しながら、学生に成功体験を積ませることの重要性を指摘しました。

難し過ぎれば学生は諦めてしまい、易し過ぎれば退屈してしまう。いずれにしても学生の学びを妨げることになります。適切な言語・アカデミック面での支援の基に、チャレンジさせることで、効果的な学びが生まれます。言葉の意味理解はコンテンツの理解に直結しているため、学生の語彙力の把握は適切な教材選びに欠かせないアセスメントになります。特に、全体の80%程度の語彙理解では、読んでいる教材を理解することはほぼ不可能になるため、教材選びがとても重要になると強調しました。

参加者からは、「今回のFDは英語を言語とする授業設計の考え方について学ぶものでしたが、日本語で教える授業にも応用できる内容のものでもありました。本セミナーの内容を参考にし、全ての授業の授業設計に役立てたいと思います」などの声が寄せられました。



講師 リッチモンド・ストループ教授

2016年度 FDセミナー（学士課程教育機構主催）

◆2016年度 第6回学士課程教育機構FDセミナー

12月16日（金）、「特色ある授業実践の紹介」のテーマで、各学部における授業実践を紹介・共有するための「2016年度第3回学士課程教育機構FDセミナー」が開催されました（於：中央教育棟AW401教室）。

碓井健寛氏（経済学部）は、「はちおうじ子ども食堂」の運営（地域と大学をつなぐサービスラーニング）を通して、学生が実践的な知識を得ることができたことを紹介しました。また、川井秀樹氏（理工学部）は1年生の必修科目として新たに導入した、グループでパスタを使って橋の模型を作成し、完成後は、橋の芸術性や1キロの負荷をかけた場合の耐久性を競い合うという「プロジェクトスタディーズ」での学びを通して、学生が幅広い基礎知識と学生間のコミュニケーション能力の向上をはかり、かつ答えのないことへの挑戦を早期に経験することによって、実社会への準備学習をしていることについて話されました。他には、「GP（グローバルプログラム）における英語教育（学部演習科目）」（波多野氏）、「地域連動講座—まちづくりフィールドワーカー—」（中山氏）、「PASSによる授業改善」（井上

<講師>

碓井健寛氏（本学経済学部准教授）
波多野一真氏（本学経営学部講師）
川井秀樹氏（本学理工学部准教授）
中山賢司氏（本学法学部講師）
井上伸良氏（本学教育学部准教授）
伊藤貴雄氏（本学文学部教授）
能見清子氏（本学看護学部講師）

氏、伊藤氏）、「看護技術演習での教育効果の高い教育実践」（能見氏）について、取り組みにおける効果や今後の課題について触れながら報告がありました。

参加者からは各実践におけるメリット・デメリットなどに関する積極的な質問が寄せられ、活発な意見交換が行われました。また、アンケートには「具体的な取り組みが紹介されていたので参考になった」「知らない授業も多かったので、興味深く聞くことができた」「今後とても役に立つと思う」などの声が寄せられました。



報告する碓井氏（左）と中山氏（右）

8大学連携事業終了の報告

学士課程教育機構 講師 山下由美子

2012年より始まった8大学による大学間連携共同教育事業が5年間の補助期間を終えました。2016年度末に愛媛大学で開催された幹事会および運営推進委員会において、5年間の事業で蓄積されたクラウド上の共通基盤システムは、事業終了後も引き続き大学eラーニング協議会など各協会とも連携しながら、全国の各大学や高大接続においても利用できるようにする。そのために、よりオープンな学びの場へと発展させていくことが確認されました。

本事業において、開発した eラーニング教材や電子書籍は右の表の通りです。数学（統計学含む）、英語、日本語等のリメディアル教材が、大学eラーニング協議会のもとで利用できます。一部、数学やTOEICの教材、SPI対策など大学の内容も含まれます。

これらの教材は、中学、高校までの内容に自信がない学

生が、自分が躓いたところまでさかのぼって自学自習できることを想定した教材となっています。

2017年度は、8月のリメディアル教育学会全国大会（日本文理大学）、3月の大学 eラーニング協議会（岩手県立大学）に合わせて幹事会および運営推進委員会が開催され、引き続き連携事業の取り組みを継続させていくことになっています。

教材一覧	
数学・統計	PRISM
情報	英語基礎
日本語	英検
マインドマップ	キャリア支援



大学教育再生加速プログラム

「大学教育再生加速プログラム (AP) 事業報告会 (第7回FDセミナー)」を開催

学士課程教育機構 助教 青木美寿華

2月25日(土)、第7回FDセミナーを兼ねて「大学教育再生加速プログラム (AP) 事業年次報告会」が本学中央教育棟AW401教室で開催されました。

はじめに、馬場善久学長が本学の教育活動に触れながら、「AP事業に採択以降、アクティブ・ラーニング等について学ぶ機会が増え、各教員が授業の場で応用している実感がします」と挨拶。次に、千歳科学技術大学の小松川浩教授が「ICT活用を通じた質保証の取組み」と題し、基調講演を行いました。講演では、基礎的学力、主体性・協働性、課題解決・専門性の学力の3要素を学生が身につけることを目的とした、教育現場でのICT活用モデルやコンピテンシーを意識したカリキュラムの体系化と可視化の取り組み方法等を紹介。そして、自大学での事例を通して、「初年次教育や導入科目などの講義系科目における知識定着、アクティブ・ラーニング型授業での知識活用・展開、さらにエビデンスに基づく教育改善のためのデータ活用等において、ICTは効果的に活用できます」と述べました。

その後、看護学部の添田百合子准教授と文学部の

寒河江光徳准教授がアクティブ・ラーニング型に授業を転換した手法とその成果に関する実践を報告し、最後に学士課程教育機構の関田一彦副機構長が、2016年度新規取組みとして、「初年次教育推進室」を設置し、入学後の補習教育等でのICT活用の検討をスタートしたことなどを報告しました。

参加者からは、「シラバスを作成している時期に、このセミナーで新たな示唆をもらい、来年度の授業を考えるいい材料になった」「AP事業の取組の中で、自分の授業をどう進めていけばいいのかわか、考えを深めるいい機会になった」「基調講演および事例報告を聴いて、すぐに授業で使えるアイデアを知ることができた」等の声が寄せられました。



(左) 基調講演講師 小松川氏 (右) 報告会の様子

2017年度学士課程教育機構FDセミナー・FDフォーラム 開催スケジュール (予定)

回数	開催日	講師	演題
第1回	5月26日(金)	望月雅光氏(経営学部教授)	質問会議を活用した同僚性を高めるFD
第2回	6月17日(土)	安永悟氏(久留米大学教授)	LTD話し合い学習法 入門
第3回	6月23日(金)	奥田太郎氏(南山大学教授)	シテイズンシップ教育の可能性
第4回	9月29日(金)	松尾美香氏(岡山理科大学講師)	レジリエンスを育む身体的活動を伴うアクティブラーニング
第5回	11月10日(金)	朴勝俊氏(関西学院大学教授)	先生方のパワポを改善するために学生のプレゼンを育てる
第6回	11月24日(金)	各学部のCETLセンター員	特色ある授業実践から学ぶ(1)
第7回	12月15日(金)	各学部のCETLセンター員	特色ある授業実践から学ぶ(2)
第8回	2月24日(土)	AP事業年次報告会	

第3回教育フォーラム

開催日：平成29年7月15日(土) 第一部10:00~/第二部13:15~
テーマ：高大接続と大学教育—高校の取り組みから大学は何を学ぶか

■第一部 10:00~12:00 ワークショップ

- 数理系の反転授業 講師：芝池宗克氏(近畿大学付属高等学校)・望月雅光氏(本学経営学部教授)
- LTD話し合い学習法 講師：関田一彦(本学教育学部教授)

■第二部 13:15~(中央教育棟AB102)

- 基調講演1「変わる中等教育—工学院大学付属高校の提案—」講師：平方邦行氏(工学院大学付属高校校長)
- 基調講演2「習得・活用・探求の学力を育てる—小・中・高・大を見通した授業づくり—」講師：市川伸一氏(東京大学教授)
- 本学の取り組み紹介 関田一彦氏(本学教育学部教授)
- パネル討論

◇8月23日(水)~24日(木) 大学コンソーシアム八王子 第7回FD/SDフォーラムが開催されます

学士課程教育機構 新任教職員紹介

- 教員 学士課程教育機構 講師……………荊紅清 山本梓
助 教……………学谷亮 野崎雅子 山本樹
- WLC 副センター長…コリン・ランドル(講師)
准教授……………ポール・ホーネス
講 師……………対馬あすか
助 教……………高玉美葉子 竹内香織 中塚絵梨佳
- 職員 学習支援オフィス WLC……………平野光彦(係長) システム支援課 栃木哲朗(係長)



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第13号
発行日 2017年5月24日
発行者 創価大学学士課程教育機構
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
<http://seed.soka.ac.jp/>